18 世紀の日独における「博物誌表象」の比較

── ケンペルのドイツ語版『日本誌』（1777–1779）と『和漢三才図会』（1712）を中心に ──

馬　場　浩　平

Vergleich zwischen den Repräsentationen der Naturgeschichten in Japan und Deutschland im 18. Jahrhundert im Hinblick auf Engelbert Kaempfers Geschichte und Beschreibung von Japan（1777-1779）und Ryouan Terajimas Wakan Sansai Zue（1712）

Kohei Baba

Abstract

Die vorliegende Untersuchung befasst sich mit der Repräsentation von ‚Naturgeschichte' in verschiedenen Textgattungen in Deutschland und Japan während des 18. Jahrhunderts. Vom historischen Standpunkt aus betrachtet, war in Europa des 18. Jahrhunderts die ‚Naturgeschichte' ein Diskurs, der in ‚Wunderkammern' und ‚Enzyklopädien' visualisiert wurde. Den Diskurs der Naturgeschichte erkennt man allerdings auch in den damaligen gelehrten Reiseberichten. In dem Japan-Reisebericht *Geschichte und Beschreibung von Japan*（1777–1779）, den der deutsche Naturforscher Engelbert Kaempfer verfasste und Christian Wilhelm Dohm herausgab und veröffentlichte, ist die Naturgeschichte Japans in Bildtafeln und Erläuterungen. Dabei ist es erstaunlich, dass Kaempfer auch die mythischen Tiere wie ‚Drache' und ‚Kirin' in seinem Reisebericht vorstellt. Er gesteht jedoch, dass sich diese mythischen Tiere ausschließlich in japanischen Büchern, wie Tekisai Nakamuras *Kinmo zui*（1666）und Ryouan Terajimas *Wakan Sansai Zue*（1712）, finden lassen. Auch diese von Kaempfer genannten japanischen Bild-Enzyklopädien enthalten interessante naturgeschichtliche Darstellungen. Es lässt sich also zusammenfassen, dass sich im 18. Jahrhundert die ‚Naturgeschichte' als ein gemeinsamer Diskurs sowohl in Deutschland als auch in Japan si-

multan verwirklichte. Um den Diskurs der ‚Naturgeschichte' zu veranschaulichen, wird in der vorliegenden Untersuchung versucht, Kaempfers *Geschichte und Beschreibung von Japan* mit Ryouan Terajimas *Wakan Sansai Zue* zu vergleichen.

1．はじめに

18 世紀のドイツと日本において、「博物誌」は共通の言説であった[1)]。本稿では、この仮説の解明のために 18 世紀におけるドイツの旅行記と日本の百科事典の「博物誌表象」を比較していく。「博物誌」とは、元来「動物、植物、鉱物、地質、気象、天文など、自然界の事物・現象を総合的に記述した書物の標題[2)]」のことだが、「表象」という概念は「再現」という意味で用いられるのが通例である[3)]。

本稿における「表象」概念はドイツの思想家エルンスト・カッシーラー（Ernst Cassirer, 1874–1945）による「表象」の定義に根差している。カッシーラーによれば、人間が自然を認識して心に映る印象は「心象」となり、「観念」へと至る。ドイツ語で「観念」は Vorstellung というが、これは同時に「表象」をも意味する。人間は「観念」を通じて知覚した自然を再現するが、その再現された観念は「言語・宗教・芸術」という形式によって現実の文化となる。この文化として実現した人工の形式（「象徴形式」）により、人間は自然から切り離されるが、同時に自然と新たな関係を構築することになる。この諸形式こそ人間の「表象行為」であるが、本稿の「博物誌表象」という概念もカッシーラーの「表象」概念と同様、実際の博物誌の標本ではなく、観照者が動植物や事物を観察し書物上で博物誌の分類に基づいて視覚化・言語化した図像や注釈のことを指している[4)]。

本稿で扱う考察対象は主に二つある。第一に日本を遍歴したドイツの医師エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651–1716）の日本旅行記『日本誌』を扱うが、特に 1777 年から 1779 年にわたってドイツの啓蒙主義思想家のクリスティアン・ヴィルヘルム・ドーム（Christian Wilhelm von Dohm, 1751–1820）によって編集・出版されたドイツ語版『日本誌』

(*Geschichte und Beschreibung von Japan*, 1777-1779)(以下、ドーム版『日本誌』と呼ぶ)を考察対象とする。また、もう一つの考察対象は、1712年の日本において、漢方医の寺島良安が編纂した絵入り百科事典『和漢三才図会』である。

この二つの考察対象の間には、「日本」に関する著作という以外にはほとんど何も接点がない。ケンペルの『日本誌』は旅行記という書物のジャンルであるが、良安の『和漢三才図会』は百科事典であるため、参考図書として分類した方が適切である。しかし、これら二つの考察対象は、各々が誕生した言語圏やテキストジャンルが異なるにもかかわらず、「博物誌」という言説で通底している。そのため、本稿では、「『博物誌』は西洋と東洋に共通した18世紀特有のディスクールである」、という視点から、このケンペルのドーム版『日本誌』と寺島良安の『和漢三才図会』を比較し、二つのテクストで表象された「日本の博物誌」の共通点と相違点を明らかにすることを主眼としている。

2. エンゲルベルト・ケンペルと『日本誌』について

エンゲルベルト・ケンペルは1651年にドイツ北部のレムゴーという町で聖ニコライ教会の牧師の息子として生まれた。ケンペルは生まれ故郷で歴史学や博物学を学んだ後、ケーニヒスベルクで医学を修めた。1681年から1683年までスウェーデンのウプサラとストックホルムの大学でも博物学などの学識を深めることで自然学者としての研鑽を積んでいた頃、スウェーデン王カール11世(Karl XI, 1655-1697)に随行するという機会に恵まれ、ペルシアの宮廷との通商関係の深化とロシアの帝室との通商関係を承認させることに尽力した。1684年、ペルシアの首都イスファハンにおいて東洋に関する見識を深めたいという好奇心が芽生えたのか、ケンペルはスウェーデンの外交使節団からも脱退し、1688年にはオランダ東インド会社の本拠地バタビア(現在のインドネシア)で医師として就職した。彼はそこで知り合った数少ないドイツの医師アンドレアス・クライヤーか

ら日本の文化や生活について学んだと言われている。それからケンペルは、1690年に長崎の出島から日本に入国し、オランダ商館医師としての職を得た。長崎の出島で知り合ったオランダ通詞今村源右衛門（1671－1736）の助けもあり[5]、ケンペルは当時の将軍徳川綱吉と謁見まで果たした後、1692年には日本から出国し、1693年にドイツへ帰国した[6]。

ケンペルはロシア、ペルシア、インド半島部、ジャワや日本で見聞・蒐集した経験や文物を、彼が習得した医学、植物学、地理学、生物学、言語、歴史、宗教などの知見をもとに、1712年、ドイツのレムゴーにおいてラテン語による浩瀚な旅行記『廻国奇観』（*Amoenitates Exoticae*）（「図１」）を上梓したが、この書物に収録された日本に関する報告は「鎖国論」「製紙法」「鍼灸治療」「茶」などに限定されており、ケンペルが日本旅行中に記した手稿全体のほんの一部でしかなかった。そして、1716年にケンペルが疝痛という病でこの世を去った後、1725年、ケンペルの甥がこの博学な自然学者の手稿や資料をイギリスに売り渡した。ケンペルの手稿や資料を買い取ったのは、英国の医師サー・ハンス・スローン（Sir Hans Sloane, 1660-1753）であった。スローンは自然学者でありかつ蒐集家としても有名であり、何よりイギリスの民間科学団体「王立協会」の一員でもあったため、1727年、同じく王立協会の会員であったスイス人の自然学者ヨハン・カスパー・ショイヒツァー（Johann Caspar Scheuchzer, 1702-1729）にケンペルの遺稿の英訳を委託した[7]。ケンペルの死後11年を経て初めて、彼が日本旅行中に記した手稿全体はショイヒツァーの英訳と編集により、英語版『日本誌』（「図２」）として日の目を見るようになったのである。さらに、1729年にはオランダ語版『日本誌』が、その後1732年にはフランス語版『日本誌』が上梓された[8]。1777年から1779年には、ドイツでドーム版『日本誌』が出版され、この時期に初めてドイツ語版『日本誌』が出版された。ドイツの哲学者イマヌエル・カントはこの時期のケンペルの日本に関する報告を参考にして、『自然地理学』（*Physiche Geographie*, 1802）の「日本」項目を記述している[9]。それから2001年に、ヴォ

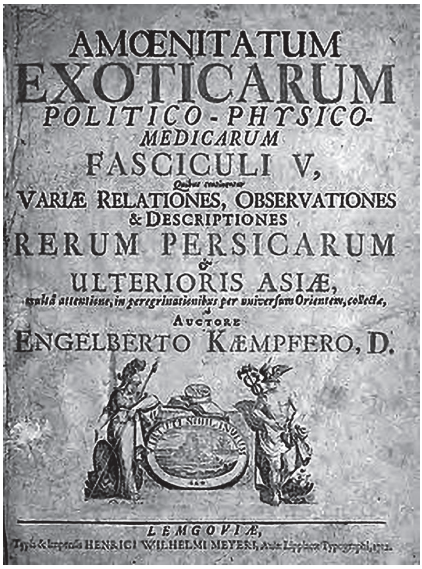

図１　ケンペル『廻国奇観』の表紙（1712）
出典：Wikimedia Commons

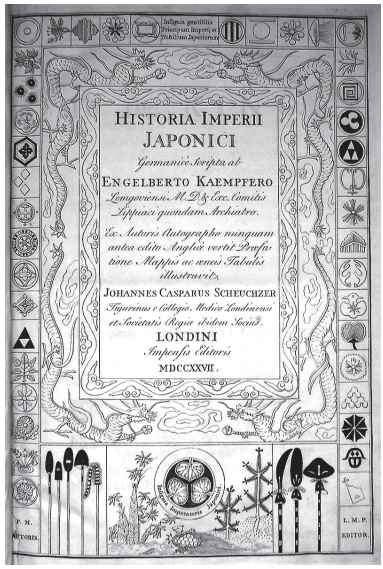

図２　ケンペルの英語版『日本誌』の表紙（1727）
出典：Wikimedia Commons

ルフガング・ミヒェルとバーレント・ヤン・ターウィールによって、ケンペルの日本滞在中の草稿とスケッチから編集された原点批評版『今日の日本』（*Heutiges Japan*）が上梓された。[10)]

このような『日本誌』の出版史からも分かる通り、18 世紀前半において異国の旅行記が最初にその著者の母国語で出版されるということはまれであった。[11)] 当時、ヨーロッパにおける学者や知識人たちに共有されていた主流の学術言語はラテン語であったため、旅行記の読者はヨーロッパ全土に存在するというのが前提であった。その背景から、18 世紀の非キリスト教圏に関する旅行記はラテン語で最初に出版されることが一般的であった。[12)]

様々な言語で編纂された『日本誌』の版がある中で、ドーム版『日本誌』は 19 世紀から 20 世紀初頭に至るドイツで浸透した「日本」言説を知

るための最重要文献として参照されていった[13]。そのため約150年間のドイツで浸透した「日本」言説の大枠は、このドーム版『日本誌』によって形成されたといっても過言ではない。次章では、ドーム版『日本誌』第1巻における博物誌表象に関して扱う。

3．ドーム版『日本誌』第1巻（1777）における博物誌表象

ケンペルのドーム版『日本誌』には、第1巻と第2巻があるが、1777年に出版された第1巻には、「日本の地理」「日本人の起源」、日本における「気象」「鉱物」「資源」「動植物」、また「神々・神人・天皇・征夷大将軍の歴史」、さらに日本の「政治」「宗教」「儀礼」「儒教」に関して百科事典のような解説が主要な記述内容となっている。これに対し、1779年の第2巻では、「長崎に関する説明」「日本におけるオランダの位置づけ」「オランダと中国との通商関係」「武士階級の解説」「江戸への参府旅行の経験」「道中の建築物・料理屋・宿屋の解説」「江戸城における徳川綱吉との謁見をめぐるエピソード」「江戸から長崎までの帰路」、そして補遺資料として、『廻国奇観』（1712）にラテン語で記載されている「日本の製紙法」「疝気治療」「鍼術（しんじゅつ）」「モグサ治療」「日本の茶」「龍涎香」に関する論文のドイツ語訳が掲載されている。

ドーム版『日本誌』第1巻にある「日本における動植物」の記述には、ドイツの大型百科事典『ツェードラー事典』第8巻（1734）にある『異国の諸事物』項目の「鉱物界」「植物界」「動物界」という知覚形式を認めることができる[14]。

まず目を引くのが、日本の自然界を記述する際でも、「鉱物」「植物」「動物」というカテゴリーで分類されている点であろう。「ケンペルのドーム版『日本誌』第1巻（1777）にある自然界の分類表」（「表1」）の「記述対象」に目を向けると、そこには『ツェードラー事典』第8巻の「異国の諸事物」項目に述べられていた「並外れて奇異であり、無名であり、また私たちの国の土地ではもともと産出されないもの」、つまりドイツでは産出

表１　ケンペルのドーム版『日本誌』第１巻（1777）にある自然界の分類表

自然界の部類	記述対象[15]	
鉱物	金、銀、銅、鉄鉱石、真珠、石油、龍涎香、サンゴなど[16]	
植物	木	クワ、コウゾ、ウルシ、月桂樹、茶の木、山椒、イチジク、クリの木、梨の木、クルミの木、ブドウ、松、杉など[17]
	花	ツバキ、サツキ、シャクナゲ、カエデ、菊（Matricaria）、ユリ、アサ、木綿、桐[18]
	穀類	コメ、オオムギ、コムギ、大豆、小豆[19]
	根菜類	カブ、ニンジン、カボチャ、コンニャク、ワラビ、レンコンなど[20]
動物	「架空の動物」	「麒麟」（Kirin）、「騶虞（すうぐ）」（Suugu）、「獬豸（かいち）」（Kaitsu）、「蛟（たつ）」（Tats dria）、「螭（たつまき）」（Tatsumaki）、「鳳凰」（Foo）[21]
	四足の野生動物と家畜	馬、牛、驢馬、騾馬など、犬、猫、野生の動物、鹿、兎など、鼠と二十日鼠、狐、百足、蛇、やまかがち、鶏、鶴、鷺、雁、鴨、雉（きじ）、山鶏（やまどり）、山鳩、鵲、杜鵑（とけん）（Foken）、鶚（みさご）（Misago）、鷗（かもめ）、海鵜（うみう）、雲雀（ひばり）、鶯[22]
	昆虫	「蝉」（Sebi）、「金亀」[23]、「最も美しい虫（玉虫）」[24]

されず、日本でのみ観察可能な動植物が中心的に記載されていることが分かる。

ケンペルは、自然の事物を紹介する際、「事物の形状・色彩・産出地」を記述しているが、事物の入手経路やその事物にまつわる逸話などのエピソードを併記することも多々あった。鉱物界にある「真珠」についてはこのように解説している。

真珠：この地で貝の珠（Kainotamma）と呼ばれている真珠、いわ

ば〈二枚貝の宝石〉は、ときおり「西国」（さいこく　Saikokf）の周辺地域でカキやフネガイという種類の貝類の中に見つかる。（…）その中でも最も立派で高貴な真珠は、アコヤガイという名前の小さく平らで密閉された二枚貝ないしはカキの中に存在する。この貝はペルシアの真珠貝とさほど変わらない形をしており、手のひらよりやや小さめで薄く、黒光りする外側の殻は脆いが、熟成していない貝殻の内部が真珠層の光沢で煌めいている。このアコヤガイ真珠はもっぱら薩摩近海や大村湾においてのみ採集可能である。（…）その地域で、私は人目につかない方法で非常に苦労して、若干のアコヤガイ真珠を採集させた。この最も立派な種類の真珠の中には、（タカラガイの粉末で作った）日本の白粉をふりかけて小箱の中にしまっておくと、一粒か二粒の小珠（こだま）を実らせ、それから三年後にその小珠が熟すと、親珠（おやだま）から離れ落ちるというような、奇妙な種類の真珠もあるというから驚きだ。[25)]

この「真珠」の記述において興味深いのは、客観的な真珠の産出地、形状、大きさ、色彩、そして入手経路や「白粉」に絡めた逸話を記している。また、「貝の珠」を、ドイツ語特有の単語で翻訳せず、敢えてアルファベット表記でそのまま Kainotamma と転写している点も注目に値する。ケンペルは自然の事物を記述する際、その事物の産出地や形状や大きさのような客観的な情報と日本伝来の逸話や日本語特有の表記をアルファベットで提示することで、西洋の学知体系では「説明不可能」な異文化表象を提示しているといえる。

このようなケンペル特有の異文化記述の中でも、その特異性が最も顕著に表れているのは、「表 1」の動物界に分類されている「架空の動物」の記述だといえる。ケンペルは、日本の動物界の記述に以下のような前書きを添えている。

> 最初に日本国内の動物類に属する、日本人が中国人から受容した何種類かの架空の動物について言及してみよう。これら架空の動物は、もっぱら空想の産物として、書物の中にのみ見つかるが、自然においては見つからない[26)]。

この記述で興味深いのは、自然学者ケンペルが、実際の自然界には存在せず、飽くまで「空想の産物」であり「書物の中」にしかいないと認識している「架空の動物」を紹介している点である（「図３」）。上部の左から見ていくと、「獅子」「麒麟」「騶虞（すうぐ）」「獬豸（かいち）」「蛟（たつ）」「螭（たつまき）」「鳳凰」の図像が白を背景にして浮かぶように提示されている。しかも、上部の最も左側に位置する「獅子」のアルファベット表記が「Kirin」となっている点は奇異な印象を与える。この図版をケンペルの『日本誌』に最初に掲載したのは英語版『日本誌』（1727）を編

図３　「ケンペルのドーム版『日本誌』第１巻にある架空の動物の図（1777）

出典：*Geschichte und Beschreibung von Japan.* 1. Bd., Tab. IX.

集し出版したヨハン・カスパー・ショイヒツァーであるが、ショイヒツァーは明らかに日本のある原典をもとにこの「架空の動物」の図版を作っている。[27] これは「書物の中にのみ見つかる」動物という、ケンペルの言及からも推察できるが、この「架空の動物」の典拠は、江戸の儒学者中村惕斎（なかむらてきさい）（1629-1702）が編集し1666年に出版した絵入りの類書『訓蒙図彙』である（「図4」）。

「類書」とは、3世紀の中国で生まれた限りなく百科事典に近い「参考図書」のことである。[28]「図4」の図版が中村惕斎の『訓蒙図彙』に記載された「畜獣」領域の図像の一部である。動物界に関しては、『訓蒙図彙』の第10巻と第11巻に記載されているが、第10巻では「畜獣」「禽鳥」、第11巻では「龍魚」「蟲介」という項目に分類され、前述の「表1」で提示されたドーム版『日本誌』の動物界の区分とは著しく異なっている。本

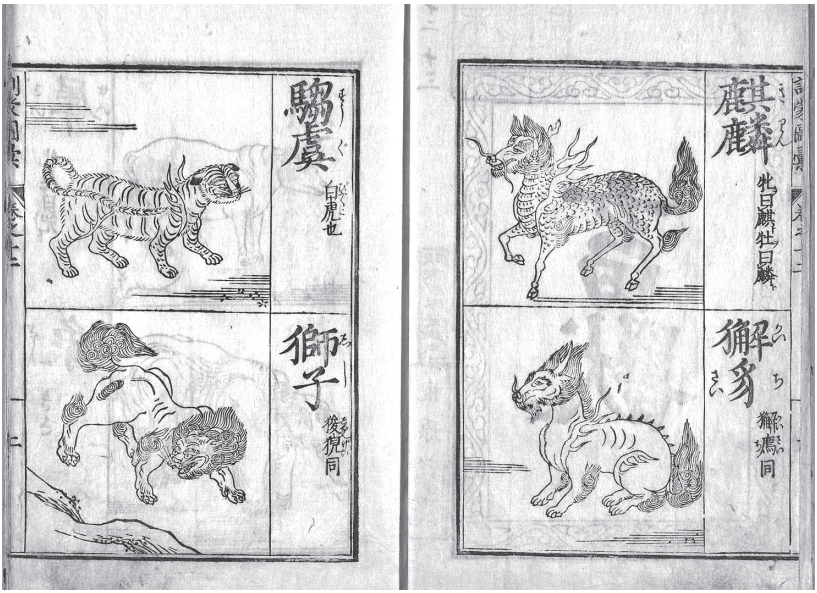

図4　中村惕斎『訓蒙図彙』（第10巻）の「畜獣」分野の図像
出典：「国立国会図書館デジタルコレクション」

来なら、ツルやキジなどの鳥は『訓蒙図彙』では鳥類に相当する「禽鳥」の範疇に分類されているが、ドーム版『日本誌』では、それらの鳥たちが「四足の野生動物と家畜」という分類項目の中に属している。ツルやキジなどの鳥類が馬や蛇やムカデなどと同系列であるかのように分類されていることは、注目に値する。

図8の『訓蒙図彙』第10巻における神話の珍獣たちは、哺乳類に相当する「畜獣」の項目に分類されているが、ドーム版『日本誌』と異なるのは、「騶虞（すうぐ）」「獅子」「麒麟」「獬豸（かいち）」の4点だけが提示されている点である。ドーム版『日本誌』の「蛟（たつ）」（Tats dria）と「螭（たつまき）」（Tatsu maki）は『訓蒙図彙』における魚類や爬虫類の範疇「龍魚」（第11巻）に分類され、「鳳凰」（Foo）は鳥類に相当する「禽鳥」（第10巻）に記載されている。ドーム版『日本誌』では、この珍獣たちは「空想の産物」であり「書物の中」にのみ存在するという認識であるため、「架空の動物」という一つの小項目に分類されているわけである。ここに18世紀のドイツと日本における動物界の知覚形式の相違点が認められる。ドーム版『日本誌』では、ケンペルは「麒麟」について次のように解説している。

> 麒麟（Kirin）は、叙述にある通り四つ足で、胸郭からしなやかに後方へ突き出た枝角が翼のように生えている、脚の速い動物である。体は馬のようであり、脚と蹄は鹿の如くであり、首はあたかも龍を思わせるような姿をしている。麒麟は神聖な動物であるため、歩行の際、一匹の虫けらや草すらも踏みつぶさないように気遣う。麒麟が星空の特殊な力から生まれる時、人間社会に一人の聖人（Sesin）が誕生する兆しとみなされている。[29]

ケンペルは、この引用において、「麒麟」の形態とその「一匹の虫も踏みにじらない」という道徳的な性質を記述し、「麒麟」が人間社会におけ

る「聖人」出現の予兆であるという逸話を併記している。興味深い点は、ケンペルが日本滞在中に長崎の出島でも江戸城までの道中でも自然観察をしていたにもかかわらず、なぜか自然界に実在しない書物上の珍獣も自然界の分類の一端として提示している点であろう。このような記述行為は、ケンペルの後に日本に滞在することになるスウェーデンの自然学者カール・トゥーンベリにおいてもドイツの医学者フランツ・シーボルトにおいても実践されなかった。

ドーム版『日本誌』において提示された、「書物上にしかないイメージの博物誌表象」ともいえる視覚文化現象について理解を深めるために、フランスの思想家ミシェル・フーコーが18世紀の自然学に関して示した解釈は一考に値する。

> そのため、おそらく「古典時代」における博物誌は生物学（Biologie）として成立することができない。18世紀末に至るまで、実際生物ではなく、専ら動植物だけが存在していた。これら動植物は、この世界において、一つの、否、むしろいくつもの綱を、全ての事物との連続性の中で形成している。すなわち、生物について語り得るとき、それは、実体の一般的な配分という形で、専らある特徴について――言葉の分類学的な意味において――のみ、語り得るということなのである。その自然の事物は三つの綱に区分されることが習慣になっている。鉱物、これには、動きや感覚は認められず、成長が認められる。植物、これらは、成長でき、ある種の知覚を実践できる。動物、これらは自ら動くことのできるものである。[30]

このフーコーの指摘で特筆すべき点は、古代から18世紀末に至るヨーロッパにおいて、動植物の分類が三つの「綱」、つまり三区分（「鉱物」「植物」「動物」）以外に細密に区分されていない点であろう。いわばこの時期のヨーロッパにおける博物誌は、スウェーデンの博物学者カール・フォン・

リンネ（Carl von Linné, 1707-1778）が確立した近代的な分類学（「属」「目」「綱」などの階級による区分）のように事物や動植物を「種」に基づいた、「切断された個体」として分類せず、動植物から鉱物、そして人工物へと「連続している」という知覚形式（ディスクール）において、分類・命名していたといえる[31]。ドーム版『日本誌』において、この「鉱物界」「植物界」「動物界」という区分は、「生物学」がまだ存在しない時代特有の知覚形式として、実際の動植物と書物上の「架空の動物たち」を連続させる機能を備えていたため、ケンペル以降に日本に滞在した博物学者には記述できなかった逸話が散見され、その結果、日本独特の文化を受容できる受け皿にもなっていたともいえる。しかし、フーコーの解釈だけでは、なぜドーム版『日本誌』において『訓蒙図彙』の神話上の動物たちが排除されないまま記述されているのか、という問いにはまだ完全に答えられていないように思われる。おそらくケンペルは、西洋の自然科学だけでは捉えられない日本特有の言説を知覚していたのではないかと考えられる。

この点についてさらに考察を深めるために、次章ではドイツから日本に視点を変えて、18 世紀における日本の絵入り百科事典『和漢三才図会』を扱う。

4．寺島良安『和漢三才図会』（1712）について

ケンペルがラテン語の旅行記『廻国奇観』をドイツのレムゴーで上梓した 1712 年頃、日本は将軍徳川家宣が治める江戸時代中期に入っていたが、日本初の絵入り百科事典といわれる『和漢三才図会』が出版された[32]。

この『和漢三才図会』を編纂した寺島良安については情報が少なく、1654 年に生まれ、江戸中期の大阪で漢方医として活動していたといわれているが、確定的な出生や背景、また没年については不明なままである。2019 年の楊亜麗氏の『和漢三才図会』に関する博士論文でも、良安の出自に関して「秋田生まれ」や「大阪生まれ」など、様々な学説を提示するに留めている[33]。

良安の『和漢三才図会』は、中国の明の時代（1368-1644）に活躍した学者であり詩人でもあった王圻（おうき、1530-1615）とその息子王思義が1607年に上梓した類書『三才図会』を基盤に編纂された[34]。この中国の『三才図会』や日本の『和漢三才図会』における「三才」という概念は、「天・地・人」という三つの領域にある事物に関しての解説という意味である[35]。中国の『三才図会』は、「天」部では「天文」類が4巻、「地」部では「地理」類が16巻、「人」部では「人物」類が14巻、「時令」が4巻、「宮室」が4巻、「器用」が12巻、「身体」が7巻、「衣服」が3巻、「人事」が10巻、「儀制」が8巻、「珍宝」が2巻、「文史」が4巻、「鳥獣」が6巻、「草木」が12巻から構成されており、その106巻にも及ぶ浩瀚な規模は東西といえども他のレファレンス書に類を見ない。

寺島良安も『和漢三才図会』の序文にあたる「自叙」で、「三才」に関して次のように述べている。

> （…）医を業としようとするならば、上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知らねばならない[36]。

良安の『和漢三才図会』は105巻から構成され、81冊におよぶ大規模な絵入り百科事典であるが、本稿では序文の「天文」（天）、「地理」（地）、「人事」（人）という範疇を基に、各項目を「表2」のように分類してみた[37]。

大項目の「天・地・人」から枝分かれされている小項目があまりに多岐に渡っているため、「人」の項目では最後はエトセトラとした。「天・地・人」の「天」項目では天体や天文や天象など、「人」項目では文化・芸術・技術・動植物、「地」項目では日本と中国の地理が記載されている。「天・地・人」は中国から日本に受け継がれた、17世紀から18世紀における世界を認識するための知覚形式であり、ディスクールであると言えるだろう。これは、18世紀ヨーロッパの「鉱物界」「植物界」「動物界」に分類される知覚形式とは異なる点である。

表２　寺島良安『和漢三才図会』（1712 年頃）の各項目の分類表

自然界	小項目	記述対象
天	天部	【天体について】天、九重天、四方、仏説三十三天、天象、日、日食など
	天文	【星座について】二十八宿、角、房、虚など
	天象	【気象について】流星、雲、霞、雹、雷など
	時候類	【年中行事について】歳、年号、閏年、正月、誕生日、七夕など
	歴占類	【占星術について】時の干、十二支、五運、太陰など
	暦日神を含む	【陰陽五行について】正月、二月、三月、四月、五月、六月など
人	人倫類	【社会の身分・階層について】帝王、太子、親王、武士、農人など
	人類親族	【血縁関係を通じた人間関係ついて】男、女、翁、孫、父母など
	官位部	【京都朝廷の官職について】
	人倫之用	【結婚から埋葬まで】嫁娶（かじゅ）、媒妁（ばいしゃく）、男色、喪、葬礼など
	経路部	【内経医学について】五臓六腑、銅人形、肺、大腸、胃など
	支体部	【外科学について】頭、髪、鼻、舌、笑、胸、腹など
	異国人物	【漢字を用いる外国人】震旦（中国の異称）、朝鮮、琉球、交趾（ベトナム）など
	外夷人物	【漢字を用いない外国人】占城（チャンパー王国）、紅夷（西洋人）、阿蘭陀など
	技芸・芸器	【天文、易、暦などに関する器具】技芸、暦本、針、筆、紙、墨など
	芸能	【芸術・文化】詩、六儀、和歌、擲石、竹馬、独楽など
	楽器類	【楽器について】琴、三線、笛、鼓、鐘など
	兵器（防備類）	【防具】軍陣、盾、甲、肩甲（かたよろい）など
	兵器（征伐具）	【銃火器や刀剣】鉄砲、砲石、地雷、弓、刀、鞘など

人	刑罰	政事、賞罰、磔など
	漁猟具	網、釣など
	百工具	竹尺、玉尺、小刀など
	容飾具	水盆、鏡、剃刀、化粧など
	服玩具	笏、扇、要、傘など
	絹布類	錦、繡、綾など
	衣服類	衣裳、裾、襦、浴衣など
	冠帽類	冠、帽子、頭巾
	襪履（くつしとうず）類	靴、草履など
	庖厨（ほうちゅう）類	釜、鍋、壺、鉢など
	家飾類	幕、帷、行李、燭台など
	車駕（しゃが）類	車、輪、鞍など
	船橋類	船、舶、橋など
	農具類	鋤、鍬、箒、案山子、糞など
	女工具	機、木綿機、砧など
	畜類	豕（ぶた）、狗、牛、駱駝など
	獣類	麒麟、獅子、獬豸（かいち）、虎、象、狐など
	鼠類	鼠、水鼠、火鼠など
	Etc...	水禽類、竜蛇部、介貝部、魚類、蟲類など
地	山類	山、峯、谷など
	中華	中華、戦国、陳、江南図、後漢など
	日本	天神七代、地神五代、人皇、朝鮮国など

また、中国の『三才図会』と日本の『和漢三才図会』にある「図会」とは、「図像が一堂に会する」という意味だが、編纂者の王圻は、『三才図会』の「自序」において、「図像」に関して以下のように述べている。

図画所以成造化、助人倫、窮万変、側幽微、蓋甚哉。

（図画は造化を成し、人倫を助け、万変（ばんぺん）を窮め、幽微を測る所以にして、蓋し甚だしかな。[38]）

この王圻の告白について、楊亜麗は「王圻にとって、『図画』とは人間の倫理をたもち、宇宙の奥義を究明する重要な存在」であると解釈している。[39]この楊の解釈に従えば、『三才図会』における図像は、事物の分かりやすさだけを目的とせず、人間の正しい生き方を導き、かつ世界の構造や本質を究明するという特性があるといえる。この解釈をさらに深めるためには、将来的な『三才図会』研究を俟たねばならないものの、『三才図会』に通底する人間の「倫理」や「世界観」にまで通じる百科事典の構想に鑑みると、ケンペルのドーム版『日本誌』に掲載された図像は「写実性」を追求しているように思われる。次章で具体的な比較を試みる。

5．『和漢三才図会』における博物誌表象

ケンペルのドーム版『日本誌』第２巻には、日本の「茶道具入れ」（「図５、図６」）が図像で掲載されている。左が茶道具入れの表側を、右がその裏側を示している。先述の「架空の動物たち」の図像と異なり、「茶道具入れ」の図像は限りなく実物の再現を目的とした写真のように描かれているが、その視覚対象は白い背景から切り取られ、ポツンと浮かんでいるような印象を受ける。ケンペルは、この日本の「茶道具入れ」について次のように言及している。

図Ａと図Ｂは、青銅の取手、釘、留針のある、どこにでも携帯可能な装置を両面から提示したものだが、図Ａが表側を、図Ｂが裏側を図示している。この装置の扉以外の全ての部位は木製であり、漆で塗られている。[40]

この引用にある「装置」とは茶道具を携帯する茶箱のことであり、ケン

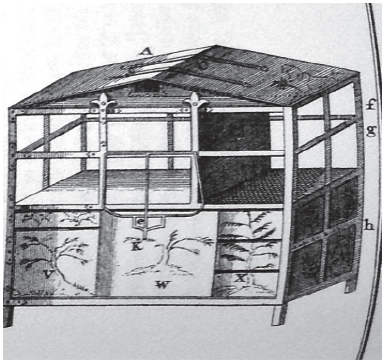

図５「日本の茶道具入れ」の表側

ケンペルのドーム版『日本誌』第２巻〔1779〕より
出典：*Geschichte und Beschreibung von Japan*. 2. Bd., Tab. XXXIX.）

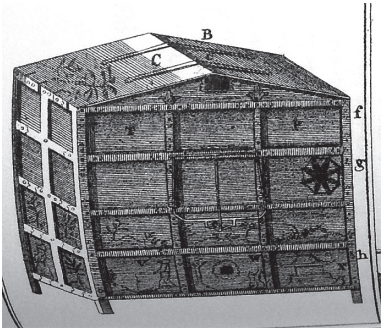

図６「日本の茶道具入れ」の裏側

ケンペルのドーム版『日本誌』第２巻〔1779〕より
出典：*Geschichte und Beschreibung von Japan*. 2. Bd., Tab. XXXIX.）

ペルは、この茶箱の文化的背景ではなく、「青銅の取手、釘、留針」という茶箱を加工している素材や「漆」という装飾塗料に専ら注目している。日本の工芸の一種である茶箱という対象だけに眼差しを集中させる「西洋的な科学的凝視」（Western scientific gaze）がここで実現しているといえる。[41)]

『和漢三才図会』では、「茶道具入れ」はないが、今日のおかもちや重箱に相当する「食盒（じきろう）」が「茶道具入れ」に似ているので、ここでは「食盒」について考察する。ドーム版『日本誌』の写実的な図像とは異なり、立体感のない記号のような平面的かつ簡素な図像が特徴的である。この「食盒」について、『和漢三才図会』では次のように記述されている。

> 思うに、「盒（さら、はこ、ふたもの、ごう）」とは俗にいう食籠（じきろう）である。小さいものは香盒（こうばこ）に用いる。大小さまざまで、描金絵（まきえ）、堆朱（ついしゅ）、青貝などの数品種がある。（…）近世のものは大へん精美である。三重にも四重にも積み重ね、餮餅酒肴などを提携するもので、舟で遠出したり野遊びしたりする際

は、行厨（こうちゅう）・提盒（ていごう）は必ず用いる器である。[42]

この記述で興味深いのは、ドーム版『日本誌』では、「茶道具入れ」に関して専ら素材や塗料を中心に記述されているのに対し、『和漢三才図会』における「食盒」の解説は、その用途に重点が置かれている点であろう。中国の『三才図会』を編纂した「王圻にとって、『図画』とは人間の倫理をたもち、宇宙の奥義を究明する重要な存在」であるという解釈が思い起こされる。「宇宙の奥義」についてはまだ判然としない点が多いが、人間の正しい生き方である「人間の倫理」としての機能は、この『和漢三才図会』の「食盒」の用途の解説で推測できる。

図７　「食盒」の図（寺島良安『和漢三才図会』〔1712〕

出典：『日本庶民生活史料集成第28巻—和漢三才図会1』1980、458頁

この日本における独特な視覚文化について、イギリスの日本学者タイモン・スクリーチは『大江戸視覚革命』という著作で次のように説明している。

> （日本人の視覚は）見える対象を、既に学びとったものの網の中に引きこみ、目に見えるもののまわりに即座に連想の輪をつくることで、これら可視の事物に意味を与えていくのである。[43]

日本の視覚文化では、視覚対象は過去に学んだ経験と知識に結び付けられ、対象そのものよりも、その用途や文化的背景と関係づけられながら、

その意味が説明される。「食盒」についても、その語源や類似した器具についての言及を通じて、連想を深めているように思われる。

この日本的な逸話や用途や意味を連想させる視覚的身振りは、先述のドーム版『日本誌』で提示されていた「架空の動物」である「麒麟」についても適合するといえる。

「図８」は、『和漢三才図会』に掲載された「麒麟」の図であるが、『訓蒙図彙』第10巻の「麒麟」の図像（図7）とほぼ同じである。この「麒麟」に関して、『和漢三才図会』では次のような注釈がある。

図８ 「麒麟」の図

出典：『日本庶民生活史料集成第28巻―和漢三才図会1』1980、525頁

『本草綱目』に、麒麟は瑞（めでたい）獣で、麕（くじか）の身体に牛の尾、馬の蹄をもっている。身体は五彩（いついろ）で腹の下は黄色である。高さは一丈二尺、蹄は円く、角は一つである。音声（なきごえ）は鐘呂（しょうりょ）（楽の音律）と一致し、行動は規矩（きはん）に合致し、遊ぶには必ず地を択び、その場所を熟知したあとでそこにいる。生きた虫をふまず、生きた草をふまず、群居せず、仲間とともに行動することもない。陥穽（おとしあな）におちることもなく、羅網（あみ）にかかることもない。王者の政治が仁にかなえば必ず姿をあらわす、とある。[44)]

上記の記述で興味深いのは、中国の明時代の医師である李時珍（1518-1593）が編纂しその死から三年後に上梓された類書『本草綱目』（1596）の解説から「麒麟」について記述されている点であろう。『本草綱目』の根幹となる

中国発祥の本草学は、人間の健康維持や病気の治癒のために薬草や鉱物などを蒐集し、それらの蒐集した動植物と鉱物の生態や形態や生産地などを記述する学問の事である。本草学の理念に関してはほとんど西洋の博物学のそれと共通しているものの、一点だけ異なるのは、本草学ではその蒐集した事物の土地の伝承や民話まで聞き取ることまでが目的とされている点だ[45]。この中国の『本草学』は、日本に1604年ごろに伝来されて以来、『訓蒙図彙』や『和漢三才図会』の思想的基盤にもなっていった[46]。『和漢三才図会』における「麒麟」の項目では、その特性描写として、麒麟が3.6メートルほどの高さと色彩、蹄の形状と角の数や鳴き声の特徴が記されているが、その他に「模範的な行動様式」として「生きた虫」や「生きた草」を踏まないで遊ぶという独特な習性も叙述されている。ケンペルの「麒麟」に関する解説では、麒麟の出現が「人間社会における聖人出現の吉兆」とされていたが、『和漢三才図会』の注釈では、「王者の政治」が道徳的に優れていれば「麒麟」がその姿を現すと述べている点に『日本誌』との相違点が認められる。ケンペルがドーム版『日本誌』において、このような「麒麟」に関連する「連想の輪」としての逸話を無視せずに記述している理由は、ヨーロッパでは説明できない、「本草学」独特の博物誌言説を西洋の読者に伝えたいという意図があったからではなかろうか。

この日本的な視覚文化に対し、スクリーチは西洋の客観的な視覚認識について、以下のように定義している。

> ここでいう「凝視」とは、眼差しを固定することを暗に示している。つまり、「凝視」とは、対象をその周囲にあるものから切り取って見ることであり、科学的であることであり、解体と選別を行う注視であり、諸対象に没入することであり、その諸対象を自律的な個別の視覚対象に分解することであり、そしてそれらの背後にある文化的な足枷を除去することだ。「西洋の科学的凝視」は綿密に客観化する観察に根ざしていた[47]。

この定義において興味深いのは、あたかも手術の執刀医が患者の切り開いた身体から内臓だけを取り出すように、「西洋の科学的凝視」という身振りが異国の事物をその関連する文化的背景から完全に切り取り、その事物の特性を微視的な視点で「個別の視覚対象」へとさらに分解していくことだと認識している点であろう。ドーム版『日本誌』における「図５、６」の「茶道具入れ」の図像も、白地に浮遊するような印象を与えるのは、この文化的背景が除去された視覚対象だけをじっくり見入る「西洋の科学的凝視」に根差した行為だといえる。

６．おわりに

本稿では、ケンペルのドイツ語版『日本誌』と寺島良安の『和漢三才図会』を中心に18世紀の日独における博物誌表象を比較してきたが、ケンペルは、日本の動植物と鉱物を記述するにあたり、「科学的凝視」に根差した客観的な認識と並んで、日本の逸話も盛り込んでいた。それは、中国の「本草学」に裏打ちされた日本の類書『訓蒙図彙』や絵入り百科事典『和漢三才図会』に記載された逸話から断片的に引用していたものであった。このような客観的な科学と非科学的な逸話を同時に記述する身振りは、ケンペル以降のトゥンベリーやシーボルトのような研究旅行者たちには見られない記述行為であった。キリスト教徒でありながらも博物学者であったケンペルは、実際に生存する動物のみならず、書物上にのみ記載された「架空の動物」も旅行記『日本誌』に盛り込むことで、非キリスト教圏である極東の国日本で独自に形成された博物学を西洋の読者に紹介しようとした。すなわち、ケンペルという人物は、「西洋の科学的凝視」というあり方と日本特有の「連想の輪」に関連付けられた視覚文化のはざまで、その偏見なき眼差しをいかんなく発揮した稀有な博物学者であったといえる。

注

１）「言説」（ディスクール）という概念はフランスの思想家ミシェル・フーコー

（Michel Foucault, 1926–1984）の著作『言葉と物』（*Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*, 1966）に由来している。フーコーは古代、中世、近世、近代、現代の各時代に浸透する価値体系を「言説」と呼んでいるが、その核となる共有された科学的認識のことを「エピステーメー」と定義している。フーコーによればエピステーメーは、「ある文化の言語、諸々の知覚規準、交流、諸々の技術、諸々の価値、実践の序列を支配する根本的な文化コード」である。Vgl. Foucault, Michel: *Die Ordnung der Dinge*. Aus dem Französischen von Ulrich Köppen, Frankfurt am Main（Suhrkamp）1974, S. 22.

2） 山口雅弘「博物誌」〔『日本大百科事典（ニッポニカ）』（小学館）. JapanKnowledge.
https://japanknowledge-com.asia.idm.oclc.org/lib/display/?lid=1001000182941（参照 2024 年 6 月 11 日）

3）「表象」はラテン語で repraesentatio、つまり「ふたたび（re-）現前せしめること（praesentatio）」という意味である。（坂部恵「表象」〔『日本大百科事典〈ニッポニカ〉』〈小学館〉. JapanKnowledge. を参照。https://japanknowledge-com.asia.idm.oclc.org/lib/display/?lid=1001000194171（参照 2024 年 6 月 11 日）

4） Ernst Cassirer: Der Gegenstand der Kulturwissenschaft. In: *Zur Logik der Kulturwissenschaften. Mit einem Anhang: Naturalistische und humanistische Begründung der Kulturphilosophie*. Hamburg（Felix Meiner）2011, S. 27–29.

5） Wolfgang Michel: Johann Caspar Scheuchzer（1702–1729）und die Herausgabe der *History of Japan*. In: *Asiatische Studien. Zeitschrift der Schweizerischen Asiengesellschaft. Études Asiatiques. Revue de la Société Suisse – Asie*. LXIV/1/2010. Bern 2010, S. 115.

6） Christian Wilhelm Dohm: Einleitung des Herausgebers. In: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. 1. Bd.（wie Anm. 14）, S. XV-XXXIII.

7） Hanno Beck: Einführung zum Neudruck. In: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. 1. Bd. Hrsg. v. Christian Wilhelm Dohm. Unveränderter Neudruck des 1777–1779 im Verlag der Meyerschen Buchhandlung in Lemgo erschienenen Originalwerks. Mit einer Einführung von Hanno Beck, Stuttgart（F. A. Brockhaus）1964, S. I-II.

8） Ebd.

9） Helmuth von Glasenapp: Anhang: Kants Quellen. In: *Kant und die Religionen des Ostens*. Hrsg. v. Helmuth von Glasenapp. Kitzingen-Main（Holzner

Verlag）1954, S. 116–118.

10） Wolfgang Michel: engelbert-kaempfer-bibliography（2000–2012）. In: *History of cultural contacts Europe - East Asia*: https://wolfgangmichel.web.fc2.com/serv/ek/eklit/lit2000.html（2024.6.13）.

11） Jürgen Osterhammel: Die Entzauberung Asiens Europa und die asiatischen Reiche im 18. Jahrhundert. München（C. H. Beck）2010, S. 187/192–193.

12） Ebd.

13） Japan: In: *Allgemeine deutsche Real-Encyklopädie für die gebildeten Stände*. 7. Aufl., 5. Bd., Leipzig（F. A. Brockhaus）1827, S. 701.

14）『ツェードラー事典』第 8 巻の「異国の諸事物」（Exotica Peregrina）項目には、次のように記述されいる。「（…）異国の諸事物という概念は、全て次のようなものに対し命名されている。つまり本国では並外れて奇異であり、無名であり、また本国の土地ではもともと産出されないもののことである。つまり、動物界では異国の動物のことであり、そこに属するのはライオン、トラ、ゾウ、サイ（…）である。鉱物界には、東洋の宝石、硼砂などが属する。植物界には、全ての異郷の植物、つまり栄光蘭、アオノリュウゼツラン（…）が属する。」（Exotica Peregrina: In: *Grosse vollständige Universal-Lexicon Aller Wissenschafften und Künste*, 8. Bd., Halle und Leipzig（Johann Heinrich Zedler）1734, S. 2342.）

15） 本稿のドーム版『日本誌』における原文の動植物名の和訳には、以下の文献を参照した。 エンゲルベルト・ケンペル（今井正訳）『日本誌—日本の歴史と紀行』上巻（霞ヶ関出版株式会社）1973、236–251 頁。

16） Engelbert Kaempfer: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. 1. Bd.（wie Anm. 7）, S. 123–128.

17） Ebd. S. 129–134.

18） Ebd. S. 134–136.

19） Ebd. S. 136–137.

20） Ebd. S. 137–138.

21） Ebd. S. 139–140.

22） Ebd. S. 141–147.

23） 今井は、訳注で、「金亀」は訓読すれば「こがね」だが、ドーム版『日本誌』の第 10 図（Tab. X.）で「金亀」の文字に併記された Fan mio のルビに従った旨と述べている。Vgl. ケンペル（今井正訳）、前掲書（上）、251 頁。

24） Engelbert Kaempfer（wie Anm. 7）, S. 148–149.

25）　Engelbert Kaempfer（wie Anm. 7）, S. 126–127. なお和訳の際に、以下の文献も参照した。ケンペル（今井正訳）、前掲書（上）、223–224 頁。

26）　Engelbert Keampfer（wie Anm. 7）, S. 139.

27）　Michel（wie Anm. 5）, S. 124.

28）　Marc Winter, Enzyklopädien im chinesischen Kulturraum – die leishu. Gigantismus und materiell manifestierter Machtanspruch in der chinesischen Tradition, In: *Allgemeinwissen und Gesellschaft*. Hrsg. von Paul Michel und Madeleine Herren und Martin Rüesch. Aachen（Shaker Verlag）2007, S. 145.

29）　Engelbert Kaempfer（wie Anm. 7）, S. 139. なお和訳の際に、以下の文献も参照した。ケンペル（今井正訳）、前掲書（上）、236 頁。

30）　Michel Foucault, *Die Ordnung der Dinge*, Aus dem Französischen von Ulrich Köppen, Frankfurt am Main（Suhrkamp）1974, S. 207.

31）　例えば前述の驚異の陳列室「ヴンダーカンマー」では、四大元素に根差した動植物と人工物の分類がなされていた。オーストリアのインスブルックにあるアンブラス城の下宮に設営された兵器庫には、占星術の天井画があるが、四大元素を司るローマ神話の神々が天井画の四方の隅に描かれている。そこには世界の調和が表象され、かつ「神話から自然、そして人工物（科学技術）へと移ろう」という言説も同時に反映されている。例えば火の神ウルカヌスが「火」や「錬金術・武器」を象徴し、地の神テラが「土」や「鉱物」を象徴し、大気の神ユノーが「気象・時間」や「歴史・古代彫塑」を象徴し、水の神ネプチューンが「水」や「真珠・貝殻」を象徴しているように。（小宮正安『愉悦の蒐集―ヴンダーカンマーの謎』〔集英社新書ヴィジュアル版〕2007／原研二『グロテスクの部屋』〔作品社〕1996 を参照）。

32）　楊亜麗『「和漢三才図会」の出典研究―『本草綱目』『本朝食艦』との比較を中心に―』（大東文化大学・博士論文）（2019 年）。

33）　前掲書、2 頁。

34）　前掲書、19 頁。

35）　前掲書、20 頁。

36）　寺島良安（島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注）『和漢三才図会 1 ―東洋文庫 447』（平凡社）1985、9 頁。

37）　この分類表の作成のために、次の文献を参照した。谷川健一（編集委員代表）、寺島良安（著）、遠藤鎮雄（編）『日本庶民生活史料集成第 28 巻―和漢三才図会 1』（三一書房）1980／谷川健一（編集委員代表）、寺島良安（著）、遠藤鎮雄（編）『日本庶民生活史料集成第 29 巻―和漢三才図会 2』（三一書房）1980。

38）　楊亜麗、前掲書、20 頁。

39） 同上。

40） Engelbert Kaempfer: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. 2. Bd. Hrsg v. Christian Wilhelm Dohm. Unveränderter Neudruck des 1777-1779 im Verlag der Meyerschen Buchhandlung in Lemgo erschienenen Originalwerk. Mit einer Einführung von Hanno Beck, Stuttgart（F. A. Brockhaus Komm.-Gesch., GmbH.）1964, S. 459.

41） タイモン・スクリーチ（田中優子・高山宏訳）『大江戸視覚革命―十八世紀日本の西洋科学と民衆文化』（作品社）1998、10 頁。

42） 寺島良安（島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注）『和漢三才図会 5―東洋文庫 462』（平凡社）1986、226 頁。

43） スクリーチ（田中優子・高山宏訳）、前掲書、10 頁。

44） 寺島良安（島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注）『和漢三才図会 6―東洋文庫 466』（平凡社）1987、44 頁。

45） 杉本つとむ『江戸の博物者たち』（講談社）2006、20-21 頁。

46） 楊亜麗、前掲書、46 頁。

47） Timon Screech: *The Lens within the Heart. The Western Scientific Gaze and Popular Imagery in Later Edo Japan*, London; New York（Routledge）2017, S. 2.